

令和5年度第4回仙台市障害者施策推進協議会 次期計画策定に係るご意見

項目	内容
仙台市障害福祉計画（第7期）・仙台市障害児福祉計画（第3期）の成果目標・活動指標について	
【成果目標】福祉施設の入所者の地域生活への移行について	<p>グループホームの整備をこれから十分というか、しっかりとやっていただきたいということと、グループホームだけではなくて、在宅福祉サービス、障害者の福祉サービスにも十分な力を注いでいただきたい。</p> <p>特に、グループホームに関してお話しすると、昨今の物価高、様々な資材不足等で、建設する、整備する法人の立場としては非常に厳しいものがあるだろうなど。それで、これからの3年間、グループホーム等の整備に当たっては、補助金等、十分な支援をお願いしたい。</p>
【成果目標】障害児支援の提供体制の整備等（障害児入所施設に入所する児童が大人にふさわしい環境へ移行できるようにするための移行調整の協議の場の設置）について	<p>タイトルが、「大人にふさわしい環境へ移行できるように」と。何となく違和感というか、障害児が年を重ねて大人になっていく、それにふさわしい環境というのが、何となくしっくりこなくて、私も十分こなされていないんですけども、「発達に応じた環境の整備」だとか、何かそういった表現を少し工夫していただきたいなというお願いだ。</p> <p>（事務局の説明後）「大人にふさわしい」という背景なり、分かりましたので、よしとしたいと思いますが、やはりこの背景が分からないと、この言葉自体に違和感が出るというのは、言い訳みたいになりますけれどもそう思いますので、どこかで解説みたいなものを入れていただくと分かりやすくなるかなと思う。</p>
【成果目標】福祉施設の利用者における一般就労への移行等（就労定着支援事業における就労定着率および就労支援のネットワーク強化や支援体制構築のための協議会（就労支援部会）等の設置）について	<p>就労定着支援事業におけるネットワーク強化や協議会の設置新設の件について、少し意見を申し上げたい。</p> <p>やはり今現在、数字が低くて、目標数値が国の指針に向かってということ自体は納得していますし、この方向性で進むことでいいと思うんですけども、この令和6年度に協議会の検討、令和7年度に設置、令和8年度に運営というのが、もうちょっと活発に早く進められるといいんじゃないのかなというふうに思っている。</p> <p>なぜかという、定着がやはり進まない理由の中に、受入側の問題というのも実は結構たくさんあると思っていて、例を挙げて申し上げると、例えばですけれども、有期雇用の問題なんかは結構大きいかなと思っている。仙台のほうで、障害者雇用で出る求人の中に、例えば行政ですとか、大手の企業さんなんかですと、有期雇用で更新の年数が限定されているものがある。それが3年以下であったりする。そうすると、結局その方がそこで働きたいと思っても、就労定着支援の数字には落ちることになってくるので、こういうことが通ってくると、結局定着を利用しない方向に進めていくという事業者だって出てくるというのも現実的にはあるかなと思う。</p> <p>ただ別に、有期雇用が悪いと言っているわけじゃなくて、有期雇用自体は法律できちんと認められているものですので、ただ無期雇用をやはりしていくところの考え方だとか、そこの有期雇用の中で更新が限定されている、それで働いている人がどのように思っているかということなんかを、やはり協議会のような場所で</p>

	<p>明らかにしていって、共有していって声を上げていくことなんかはやはり必要かなと思う。</p>
	<p>障害者雇用の雇用の前提の場面で、定着支援を必ず利用してくださいというふうに企業側が言うことなんかがある。これは本当におかしな話で、ジョブコーチ支援なんかは企業側からもニーズを出すことができますけれども、就労定着支援はあくまで総合支援法の本人が契約して本人に自己負担が発生するようなものになってきていて、ただ問題は、そういうことを聞いても、それを疑問に思わない支援者というのが今はたくさんやはりいるのかなというふうに思っている。それはやはり集まる場がない、就労定着支援はすごく孤独で、やはり支援者同士で顔が分かる人は会って共有していますけれども、みんなが一堂に会す場面がないので、企業との中で雇用というものが前提になってくると、すごく支援者もそこが疑問に感じなくなったりだとか、企業の言うとおりに支援者、当事者の方に利用を前提に進めていくということなんかがまかり通る感じになってしまう。</p> <p>この数字設定とか、枠組みというのが、そういう危険をはらんでいるというところを、たくさんのまずは声を上げ合っていく。いいところもあれば、そういうリスクもあるよね、そういうときにどうしている、どういうふうに考えるのがいいんだろうというふうに、数字を達成してくためじゃなく、ためもそうなんですけれども、もっともっと私たちが働く方を支えるというところの理念を共有できるような、そういう協議会を設置していくということが、定着率が上がっていくということにやはりつながるかなというふうに思っている。</p>
	<p>前も就労で会をいただいたときに話したときにも、私、最後に言えなかったことで思ったんですけども、この就労のサービスがきちんとできればできるほど、働く自由というのがすごく失われているなど、ちょっと正直思ったりしている。今、精神発達障害の方が半数ぐらい仕事を求めている求職者の中にはやはりいらっしゃるといふ現実を考えたときに、何て言うんでしょうね、例えば夏の3か月間働いて、その後、何かカメラを撮る旅に出るとか、何かその人が考える働き方とか、ウェルビーイングみたいなものを、本当はそのステージごとに応援していくのが本来の福祉の就労の支援者の役割なのかなというふうに思うが、そもそもそういうことを就職3か月で例えば辞めたら離職になっちゃうので、それが分かっている支援者はそういう求人を勧めなかったりということが実際はあったりとか、何かそういう制度の枠組みで、どんどん自由さが失われているというのも、やはりもう少し本来の総合支援法の就労の意味合いだとか、サポートする私たちの質みたいなのところに絡んでくるのかなと思うので、こういう協議会、就労に限らず、そういうことがもっと話し合えるような支え方ができればいいなというふうに思う。</p>
<p>【成果目標】 障害児支援の提供体制の整備等</p>	<p>障害児支援の提供体制の整備のところ、実際に児童発達支援センターに勤務している者として、近年の児童発達支援センターによる相談支援回数というところが、かなり1名の職員が主に実践してやっておりますけれども、さらに令和6年度</p>

	<p>目標値が徐々に上がっているというところを見ますと、そのニーズとしてはあるんですけども、職員の多忙が本当に極めて、私も管理側として心配になるところでもある。もう少し人員体制のところも、ともに整備していただくとありがたいかなと思う。</p>
<p>その他（成果目標の表現について）</p>	<p>先ほど来から皆様のご意見を伺っていて、私もいつも感じるのですが、表現が非常に難しいというか、読んでも多分皆さんが共通の認識を持てるような表現になっていないなといつも感じていた。確かに国の指針がそのようになっているということなのかもしれないんですが、やはりそれはそれとして、表現としては仙台市がするものは、もっと分かりやすい平易な表現を使ってもいいんじゃないかなと思う。</p> <p>先ほども、「大人にふさわしい」というのも、私も非常に引っかかって、どういう意味なのかがちょっと分からないなと。むしろ大人にふさわしいというのって、ふさわしくしなさいという強制的な意味合いが強いと思う。ただ、先ほどお聞きした限りでは、大人として尊重されるにふさわしいということをお願いのつもりだと思いますので、もう少しみんなが読んで分かる表現に思い切って変えたらどうなのかというふうに思いました。</p>
<p>テーマ別議論（障害児）について</p>	
<p>障害児支援の現状と今後の方向性について</p>	<p>特に、人材育成とサービスの充実、これは記載している内容をしっかりと今後の3年間取り組んで、充実していただきたいと思う。</p> <p>それと、附属の資料を読んでいて感じたのは、相談の窓口とか、支援、サービスのメニューが増えているものの、求めている方がそれを知らない、なかなかアクセスできないという現状が、すごい訴えとして出ていた。このような状況というのはぜひ改善が必要だと思いますので、今日、デジタル化による情報の提供とか、もう一つは関係機関が相互に相互のサービスを必要とされる方に紹介できるような体制、あるいはそのための必要な研修、これを行っていただきまして、漏れることのないというか、求めている方に適切なアドバイス、サービスの窓口を紹介できる、そういった体制をつくっていただきたいと思った。</p> <p>今、アーチルからもありましたけれども、サービスはこれからもどんどん増えていこうとしているんですが、担い手がまずは少ないということと、それからなかなか受皿が実際に、このサービスに合わせて、きちっとしたものが今後つくっていかれるのかどうかということが一番大事なのかなと思う。</p> <p>サービスをつくる上では、しっかりした担い手をきちんとやはり整備する必要性もあるというところが大事でもありますし、それからこのヒアリングの内容の中でも、お母さんたちが求めるサービスが、なかなか知らなかったり、それから学校とかそういったところじゃなくて、実際には放課後のデイあたりでサービスを知ったりということも中には記載してありましたので、やはりもうちょっとそういったお母さんたちに、身近にサービスが伝わるような方向性で進めていかないと、実際にサービスがあっても知らなくて使えなかったということでは駄目なんだろうなと。そこのところをしっかりと今後踏まえてやっていただきたいなと思う。</p>

今、資料2-1やヒアリング、それからアンケートの内容を読ませていただきまして、すごく心に響くものがたくさんあった。特に、アンケートやヒアリングの内容からは、ご家族の心の叫びが伝わってきて、すごく自分は今まで知らなかったなと思うことがたくさんあった。

そして、改めて感じたのは、2つあるのだが、1つはやはり障害児、障害者、どちらもそうだが、本人への支援と家族、どちらの支援も支援の両輪としてとても大事だなと思った。本人が自分らしく生きるためには、家族への支援というのがとても欠かせないものだと思う。家族の中には、親やきょうだいが含まれると思うが、家族が生き生きと生活することによって、本人により影響があると私自身の体験からも感じている。

私は精神疾患を発症しまして、家にいる時間が病気になる前よりずっと長くなり、家にいると親と衝突する時間が増えてとても辛いことがあったが、そのような中、親が家族会の仲間から助言をもらって、仕事や趣味の活動を辞めずに続けてくれたことが、私にとってとても救いになった。家族の負担を減らして社会全体で支え合う具体的な目標、具体的な仕組みづくりが、とても重要だなと思っている。

そこで、先ほど、資料2-1の11ページで、今後の方向性として(1)から(5)までの具体的な目標というか、具体的な内容が示されていて、とてもいいなと思ったのだが、この5つの中で、特にどれを重視していくのかといったあたりをお聞かせいただけたらありがたいなと思う。

先ほど、委員さんのほうから、家族への支援というところが出ましたが、まさしく私が勤務している児童発達支援センターでも、ほとんど7割、8割が家族支援、保護者支援というところが重視されている。

あと、先ほどの今後の方向性のところでも、縦横の連携によるライフステージを通じた支援というものがあったが、これのところで今ちょっと抱えている課題を紹介させていただきたいと思う。

在園児の中には、小学校の低学年のきょうだい児がおりまして、そのきょうだい児さんが不登校になっているというケースがある。対象児が、そのために母子通園に来られない、療育の保障ができないというような事態が発生している。いろいろ親御さんとも相談しながら、母子通園だが、単独で通っていただくかというようなところも考えながらやっているが、実際は家族の悩みに寄り添いながら、またきょうだい児さんの支援体制の整備というところも介入していかなければならないと思っている。

きょうだい児さんも発達の課題を抱えているケースも結構ございまして、そちらのほうも気づきの支援が必要というところもありますので、本当に学校さんとか、あるいはアーチルさんとともに、そのきょうだい児さんにも介入していくということが、目の前の課題として大きくなっている。

卒園児の保護者にアンケート調査をしたことがあるが、その結果からも、先ほど出ていました障害児の育ちを地域全体で支えるというところが、とても大切だなということで、特により身近な地域でタイムリーな相談ができる場所というものが、やはり皆さん望んでいる。

特に、法人のほうで関わっているケースで、成年の方の保護者の方などは、親亡き後の相談窓口を切に希望されている。行政からの書類などが発送されてきたときに、実際に書類を読み込んで、そして申請したりするときに、やはり支援が大切になるということで、これまで家族が担っていた役割、それから日常の支援というものを誰が代わりにやるのかというところが、本当に切実に悩んでいらっしゃる方が多いと思う。その家族機能を補完する身近な存在、場所というものが、今本当に求められていると思う。

そういう意味で、やはりタイムリーな支援というのが大事になってきますし、特にちょっと話はまた別になりますけれども、ご近所付き合いが希薄化している昨今、子育て世代の親御さんが、やはり孤立しやすいというところがある。特に、保護者の方も他者とのコミュニケーション面に苦慮している方が多くて、自ら支援者をつくったり、あるいはピアサポートを期待できるというようなところの考え方は、もうちょっと成り立たないかなというような側面もあるので、多様化する家族への支援の体制とか、中身の質のところを深めていかなければならないなというふうに私自身が考えている。

あともう1点、子育ての現場では、スマホがもう本当に当たり前に使われていて、スマホでの子守りみたいなのところももう出てきて、一方通行のコミュニケーションのスタイルが、やはり子どもたちの成長に大きく関係していて憂慮するところ。

言葉の遅れとか、相互のやり取りが育ちにくい状況、社会環境になっておりまして、子育て全体で何とかしなければならない、それも緊急性があるかなというふうに考えている。特に、いろいろな連携は必要だが、母子保健とのシステムと連動した相談支援体制というのをきちんと仙台市では打ち出しているのだから、私たちの現場の中からも、そこを有機的につなぎながら、効果的な連携を進めていかなければならないというふうに思うので、仙台市全体でもその機運を高めていただきたいなと考えている。

今いろいろ伺って、自分の子どもが小さいときのことを思い出したりしていた。やはり自分の子どもの障害が分かったときから、ずっと今まで継続してきているが、その時々で悩みが違うけれども、その始めが一番大変かなというところ。だから、そのときに誰と会うか、どういう支援をしていただいたというか、やり取りができたかということで、その後の保護者の気力というか、これからどうやっていこうというのが違ってくるのかなと思う。

何年前にアーチルさんを立ち上げたときに、こういうところを充実してほしいということで、いろいろ意見を出させていただいたことが今思い出されるが、今後の方向性ということで、(1)から(5)までというところで、それが大事というこ

とは分かるが、これって前から言われていること。これがずっと継続して大事なことだと思ってくだっているというのは分かりますけれども、これが少しでも減るような形に持っていけるといいのかなと思う。

でも、その中でいろいろ具体的なものは、私の子どもの小さいときよりもさらに充実して、中身が変わってきているので、これをどんどんいいものにまた増やしていただけるといいかなと思うのと、先ほど委員さんもおっしゃっていましたけれども、どんどん数は増えていくけれども、それが適したものかどうかというのを誰がどのように見ていくのかなというところを、ちょっと心配になりますけれども、そこもチェック項目というか、チェックする場所が機能していくといいのかなと思う。

自分のときは母子通園から始まって、母親同士といますか、保護者同士の関係もすごくよくて、情報交換などもすごくできた。ただ、今は集まる場所あまりないとか、あと孤立しているお母さんたちが結構いる。そして、電話相談であったり、そういうところにはかけられるけれども、実際面と向かって話ができにくいという方が増えている。

先ほど、スマホの話も出ましたけれども、スマホで全部情報が取れる時代になっているということで、間違っただけの情報も流れていくと思うので、その辺を孤立している方たち、仲間をなかなかつくれるお母さんたちをどうしていくかというのもちよっと課題なのかと思った。

今、委員のお話を聞いて、同じ視点かなとも思うが、アーチルがあることによって、非常に相談機能が充実しているということはよく分かるが、一方、本当に身近なところで、いわゆるインクルーシブとか、子どもの発達支援が本当に進んでいるんだろうかというところ、そこは先ほど菅野委員も言っていたように、なかなか難しいところがあるのかなというのが現実じゃないかなと思う。

例えば、保育所等訪問はやっていると思うが、市内の保育所、幼稚園で、どれくらい障害のある子どもと一緒に保育されているんだろうかとか、保育所の訪問や児童発達支援は学校には行けない。学校にも入れますかね。私は分からない、学校には行けないように思っているが、学齢児の相談はアーチルでやっていると思うが、学校のほうからの求めに応じて、非常にクラスで対応の難しい子どもに対してとか、そういうことができたりとか。

放課後デイの数はどんどん増えているが、ちょっとこれも違うかなと思っていて、それは何でやはり障害のある子どもが放課後まで分けられなきゃいけないんだろうか。これはもっと学童クラブとか、学童保育に支援をすることによって、もっと当たり前の、インクルーシブという話もさっきも出ていたが、進むんじゃないのかなと。

そういうところで、せっかくここまで進んできたアーチルを中心とした機能を、これから地域づくりというところにもっと移していく。これは課題とか、今後の方向性にも書かれているので、そこをもう少し具体的な形が見えるようにしていくことが必要なんじゃないかなというふう思う。

本当に市内の全ての幼稚園，保育所で，障害のある子どもが特別支援保育を受けているんですよとか，学童クラブで障害のある子どもも相当一緒にいられるんですよというような，一緒にいられるという方向性を支援できるような仕組みがあるといいかなと。だから，それは今日，議題の1のほうで，施設待機者280人と言っているんだけど，これはだからやはり日常の地域生活支援ができていないから，親亡き後の心配のための280人だというふうを読むこともできるんだとすると，やはりもっと地域をつくるということを具体的に進めていく段階に来ていないかなというふうに思う。

今日は，障害のある子どもさんがメインの課題と，議題ということで，いろいろ拝聴していた。なかなかハローワークと直接関連してくる部分がない内容ではあるが，資料を今読ませていただきまして，例えば資料2-2の1ページの一番下のところ、親の就労のハードルが高いと感じているといった部分が，ハローワークのほうでは担当部分になってくるのかなと考えている。

どうしてもハローワーク，従来，企業さんから求人をしていただく際には，なるべくフルタイムであるとか，正社員とか，そういったところをメインに当たってきているところなんですけど，こういった意見を拝聴しますと，必ずしもそうではなくて，短時間の勤務とか，お仕事の日数も少なめ，そういったものも一定程度のニーズがあるんだなというところを認識させていただきましたので，今後ハローワークのほうでも，そういった部分についても企業さんのほうから求人をご提出いただくような働きかけなども求められる部分かなと思って聞いていた。

私は，視覚障害当事者団体の会長をしておりますが，もう一方で視覚支援学校の教員もしております。視覚支援学校は，昨年度から幼稚部というのができまして，下は3歳から上は60代までという幅広い年齢層の生徒が通う学校になった。

その幼稚部保育の部分，幼稚部ができたときに，やはりこの子どもを幼稚部に入れたいのだけれども，幼稚部に行っていない時間，いわゆる保育する部分の時間が，親がつかないのでも，なかなかそのほかのところで保育をしてくれないので，結局学校には入れなかったという事例があった。結局，入れなかった時間は，保護者がその子どもについていなくてはいけないということで，前にもちょっとどこかでお話ししたことがありますけど，それを今ちょっと思い出して聞いていた。

今のところでしたら，そんなことはないのかもしれませんが，切れ目のないという先ほどの話の中で，学校にいるときの部分，それから学校がないときも地域の支援でその子がちゃんといられる場所ができれば，保護者もその間，仕事ができたりするといったようなところで，そのあたりの連携も含めたサービスというか，支援ができるようになっていくといいのかなと思って聞いていた。

それから，就労関係のところでは，私は視覚障害のところしかはっきりは分かりませんが，視覚障害者のジョブコーチと言われるようなものは，東京とか大阪ぐらいにしか実はなくて，実際には仙台あたりだとアイサポートさんがそれをやってくれているわけですけども，なかなか視覚障害に特化した就労の定着支援というのは，うまくいっていないというか，なかなか難しいようだ。結局，

数か月通ったけれども、やはり定着しないで、家に閉じ籠もっている視覚障害者は結構な数いる。そのあたりにも、ぜひ光を当てられるような事業体制になっていただけるといいのかなと思う。

それから、5つの柱というかの中での話ですが、特に連携というところがやはり大事なのではないかなと思う。視覚障害者に限ったところの話しか申し上げられませんが、例えばですが、これは全国でだんだん今そうなっているんですけども、何らかの目の疾患で眼科に通って、その眼科さんが、この患者さんはもう視力の回復は難しいよとなったときに、スマートサイトというところにつながるようなパンフレットのようなものをくれる。そうすると、そのパンフレットには、見えなくなりそうな、あるいは見えなくなった人のために、学校でしたらこういうところがあるよ、仕事をしたいんでしたらこういうところで支援してくれるよ、生活の困り事でしたらこういうところに相談できるよという、僕らはスマートサイトと言っているんですけども、いわゆる仙台市の場合だと、ですから全ての障害に当てはまる、発達障害だったり、知的障害だったり、精神障害、いろいろある、たくさん増えているんだと思うが、そういうところを連携できるスマートサイトのようなものを作っていくと、そういう情報がうまく回っていくのではないかなと思う。

アーチルさんが、一番もしかしたら大変になるのかもしれませんが、そのようなことを今考えていくと、この仙台市で今出された5つのことがうまく回っていかないかなと思って、皆さんの意見であったり、お話を聞いていた。

今日の議論も含めてなんですが、今日は教育局の方やこども若者局の方もいらしているのでお話をしておきたいと思うんですが、行政の方はよく聞いていただきたいんですけども、ここで議論しているということ、物すごく簡単に言うと、そもそも障害児や障害者の方に対する支援というのは、いつも私ここで言うんですが、障害児や障害者及びその家族の遠慮と諦めを基に行われていることが多い。インクルージョンの話が今日出ていましたけれども、インクルージョンって一番簡単に言うとどういうことかという、どんな条件があっても同じ選択肢を持つということ。だから、国も施策を進めて、重度の子であっても保育の現場で健常児と一緒にやりましょうという方向に持ってきている。

それで、実は仙台市は、例えば、歯科診療等々についても、かなり昔からそういった方の歯科診療の選択肢を保障するというので、積極的に施策を取り組んできた。そのほかにもたくさんある。先進的なことをしてきている。

それで、いよいよ国もそういう方向に来たので、我々がやってきたことをしっかりと意識しながら、遠慮や諦めの要らない、同じ選択肢が持てるということ。そのためには何が必要なのか。例えば、保育所であれば、保育士さんが苦勞されて障害児の支援に当たっているということも私は知っている。それで、これからはそういった苦勞をされている保育士さんたちに対する教育や支援をしっかりとしていく。これだけ相談等々が大変だと、アーチルは大変だというお話も出ていますけれども、私もそう思う。であれば、もっと身近の保育所や、それから教育機関等々の身近な相談や、ちょっとした困り事について、お手伝いできるような方向を持たないと、

今議論したり、ここに書かれていることが前に進まないということになる。

そのためには、まず今日せっかく2つの局の方に来ていただいていますので、よくお聞きいただきたいんですが、同じ会社ですから、同じ会社の中で、ぜひこういったことを進めていただけるようお願いしたい。しっかり同じ会社の中で連携をして進めていただくということが、私は今日の議論を進めることになると思う。そういったことを実現するために私たちは話している。

なので、今回計画策定に当たって、こうやっていろいろ意見を言わせていただいているんですが、私たちも一生懸命取り組む。行政も、これまで一緒に積み重ねてきたことをさらに前に進むことができるように、一緒に手を組んでやればと思う。それが他の委員からあった地域づくり等々の話の基本になると思いますので、私はこの場で、ぜひそれができれば、先ほどの小野委員のお話でもありましたけれども、障害を理由に、それからほかの理由も含めて、選択肢を狭めてはいけないということだと思う。大人になってもしっかり同じ選択肢が持てるような取組を一緒にすることができればと思う。

それで、今日、委員がかなりきついことを言っていましたけれども、アーチルさんが大変なのは十分分かる。ただ、積み重ねてこられたもの、これは前と同じだよというふうに表現的に言われるんだけれども、少しずつ積み重ねてきたことがある。そういったこともみんなで分かるように、共有できるようにご説明をいただいたり、文書に残していただくと。していないのでしたらいつまでやるのと言いますけれども、私も積み重ねてこられたことは知っているんで、こういうことはやってきたんだよと、だからさらに進めるんだよというふうに言っていただければ、みんなもそうだねって、協力してやっていこうということになるので、ぜひよろしくお聞きしたいというふうに思っている。